

Drawing a bright
future for
福島の元気な
未来を描く
through the power
of creativity

藤佐 ヴィヴィアン

磯崎道佳

川村亘平 斎

木村充伯

創造の力で 福島の元気な 未来を描く

アートで広げる みんなの元気プロジェクト 2024 報告書

創造の力で、人と人がつながり、 新たな物語が生まれる。 アートの力で、 福島の「元気」を世界へ。

も く じ

3	アートで広げる みんなの元気プロジェクト概要
4	マップ
6	復興公営住宅ワークショップ① ヴィヴィアン佐藤 ヘッドドレス
16	復興公営住宅ワークショップ② 磯崎道佳 ランチマット
22	浜通りアートワークショップ① 川村亘平斎 影絵制作 & 上演
28	浜通りアートワークショップ② 木村充伯 油絵の具で動物づくり
34	成果展示

「アートで広げる みんなの元気プロジェクト」は、東日本大震災で甚大な被害を受けた浜通り地域や復興公営住宅にお住まいの方々を対象に、創作を通じた自己表現の機会を提供し、地域コミュニティの再生を支援するプロジェクトです。

本プロジェクトは、アートによる生きがい創出と、コミュニティの再構築を目的にワークショップを実施。参加者と共に生まれた作品を通じて、福島の「今」、そして「復興の歩み」を力強く発信します。

2024 年度も多彩なアーティストが独自の視点と技法を活かし、参加者と共に創作活動を行いました。

ドラッグクイーンで美術家でもあるヴィヴィアン佐藤は、個性と創造性を表現するヘッドドレス制作ワークショップを開催。参加者は自由な発想で装飾を施し、身にまとうアートを楽しみながら自己表現の可能性を広げました。

アーティストの磯崎道佳は、ランチマットを制作するワークショップを実施。日常の食卓を彩るアートとしてのランチマットを制作。地域住民が集い、交流を深めながら、手を動かす喜びを共有しました。

影絵師の川村亘平斎は、夜の森エリアを中心に影絵のワークショップを展開。影絵の世界を通じて、地域の歴史や文化を表現し、光と影が織りなす幻想的なアートに参加者と共に創り上げました。影絵の持つ物語性を活かしながら、人々の記憶や想いを形にする場となりました。

彫刻家の木村充伯は、福島県浜通り地域でのワークショップを開催。福島県の動物に寄り添いながら、生き物の多様性と新たな表現が交差するアートを生み出しました。

それぞれのアーティストが手がけたワークショップを通じて、参加者たちはアートの楽しさを体験し、新たな視点とつながりを得る機会となりました。

2025 年 3 月 15 日(土)には、本年度の集大成として、ヴィヴィアン佐藤、磯崎道佳、川村亘平斎、木村充伯の 4 名による展示を開催。復興公営住宅や浜通りでのアートワークショップを通じ、アーティストと参加者が共に創り上げた作品は、アートがもつ可能性と、福島の未来への希望を象徴するものとなりました。

- | | |
|----------|--|
| □ 主催 | 福島県 |
| □ 協力 | NPO 法人みんぶく、NPO 法人インビジブル |
| □ アーティスト | ヴィヴィアン佐藤、磯崎道佳、川村亘平斎、木村充伯 |
| □ キュレーター | 山本暁甫 |
| □ 記録撮影 | 吉田和誠 |
| □ アシスタント | 菅野いろは、関拓人、高子結衣、西塚笑子、二瓶麻美、原田夏葵、日向志帆、藤澤あおい |
| □ 受託事業者 | 一般社団法人 HAMADOORI13 |

2024

WORKSHOP MAP



復興公営住宅ワークショップ① ヘッドドレス
ヴィヴィアン佐藤 アーティスト、非建築家、ドラッグクイーン



復興公営住宅ワークショップ② ランチマット
磯崎道佳 アーティスト



浜通りアートワークショップ① 影絵制作 & 上演
川村亘平斎 影絵師、音楽家



浜通りアートワークショップ② 油絵の具で動物づくり
木村充伯 彫刻家



全15箇所 **249**名参加
(延べ人数)

ヘッドドレス

復興公営住宅ワークショップ①

ヴィヴィアン佐藤

暫定的な社会のグルーガンの必要性

ヴィヴィアン佐藤 アーティスト、非建築家、ドラッグクイーン

お化粧や着飾ることは何か別のものに変身したり、違う自分になることではありません。お化粧という行為はすればするほど削ぎ落としていくことで、どんどん裸に近づいていくこと。そして最終的には自分の皮膚を完全に裏返しにすることです。いわば内面を曝け出すことなのです。また、着飾ることも内面にあるものをほんの少しだけ迫り出して見えるようにしてあげること。要するにお化粧も着飾ることも自分ではないものに変身することではなく、本来の自分のひとつに戻ることだと考えています。

頭を固有の土地に見立てて、ヘッドドレスをそれぞれの頭上に建つ「建築」と捉えています。固有の土地に一体どのような「建築」が建ち得るのか。頭皮という土地に建ち上がった歩く「建築」と、現実の風景や街並みの稜線との間にはどのような化学変化が生まれるのでしょうか。

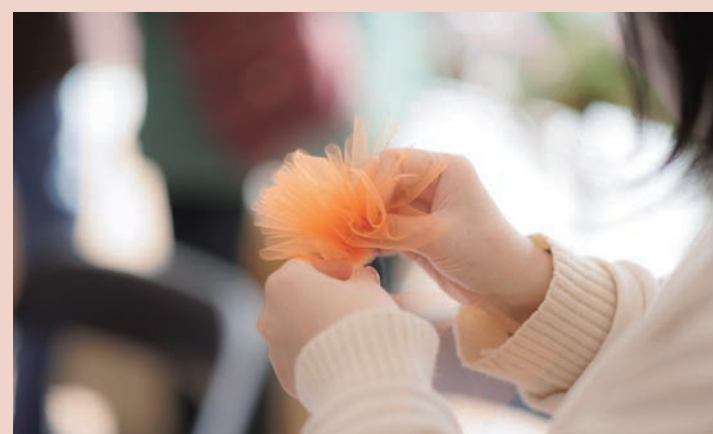
今回、色とりどりの造花などのヘッドドレスの材料は都内から持ち込んだものではありませんが、それがどのような場所でどのような人々によって作られ、どのように福島復興住宅の人々に使われたのか。完全なる人工物の造花ではありますが、その物流や移動は自然界の植物や種子の移動とも重なるはずです。

福島沿岸部で故郷を追われた人々の移動や移住は、地震や津波という自然災害でもあり、原発事故という人工災害が所以でもあります。

その人工物である造花たちを^{にかわ}熱可塑性のプラスチック製の接着剤で固定していきます。グルーガンは約120度で溶解し、常温で固化します。人工物を人工膠で電気を電源とした熱で溶かし、固定するのです。熱状態によって変化する人工膠によって造花は強く固定されます。しかし、長い月日が経てば、やがては人工膠はボロボロになり造花は外れていくでしょう。

福島沿岸部から移住を余儀なくされた人々もまた復興住宅に住むことになりますが、14年経った現在、様々な問題が頻発してきています。ワークショップという束の間の交流で初めて語り合った人、自分を曝け出した人、普段は見えない相手の一面を知った人がいます。しかし、それはあくまでも暫定的なひとときであり経験です。いわば社会的な暫定的なグルーガンによる交流です。しかし、そのグルーガンの作用でさえ現在の福島の復興住宅には必要だと感じております。

そしてそれは被災地である福島に限らず、今の日本、先進国の至る所で見受けられることでもあるのです。被災地での課題解決は、日本や世界の共通の課題解決に繋がっているはずだと痛感しています。





2024.10.28 - 2025.2.26







ヘッドドレス

ヘッドドレスは美術家のヴィヴィアン佐藤の代表的な作品の一つです。今回はヘッドドレスの制作と制作したヘッドドレスを着用してポートレートを撮影するワークショップを県内 10箇所で開催しました。

ヴィヴィアン佐藤はヘッドドレスについて一人ひとりの中にある名付けられない部分(感情・ジェンダー・時間など)、普段隠れている大切な一面を解放し、もう一度「自分」「私」の在り方に向き合わせてくれる装置だと話します。

ワークショップを通して生まれたヘッドドレスは二つとして同じものではなく、一つ一つが独自の世界観を持っているものに仕上がりました。また、ポートレート撮影時には普段は着用しない華麗な衣装を身に纏って撮影する方もおり、賑やかなワークショップとなりました。

[実施箇所] (五十音順)

石倉団地、郡山市労働福祉会館、下田第二市営住宅、富田団地、勿来酒井団地、西町団地、東原団地、南町団地、守山駅西団地、若宮団地

ヴィヴィアン佐藤 づいづいあん・さとう

美術家、文筆家、非建築家、ドラッグクイーン。
すべてのジャンルで異端。ドラッグクイーン歴 30 年。
全国の町興しコンサルタントを歴任。尾道観光大使。
サンミュージック提携タレント。大正大学客員教授。
など幅広く展開。「私が新宿」「新宿とは私」と公言する
ほど深い新宿愛を持つ。



浜通りでアートを「食」してみる

磯崎道佳 アーティスト

アートは「生活」を豊かにするもの。私はそう信じてアートに取り組んでいます。

人と動物との違いを考えるならば、動物が生きていく生存のための行為に、文化的な側面を与えたことが、現代の私たちの生活を成り立たせています。「食」をひとつとっても、獲ってきた食料をそのまま食べるのではなく、より美味しく調理し、美しい器に盛って、リラックスした時間と会話を楽しむ。

人の「食」にはアートが必要不可欠です。

そこで、私の学生時代の話なのですが、思い出すことがあります。

クラスの女の子たちが休み時間やお昼にグループを作って、手作りのケーキやクッキーをシェアし楽しそうに音楽やテレビの話をしていました。笑い声と会話が響くオープンな雰囲気は、ひねくれ者の私にも心地よく気になっていました。それで、ある日、昔からケーキ作りが趣味だった母を見ていたのもあって、私もスポンジケーキを焼き、学校に持って行きました。

休み時間に、「ケーキを焼いてきたけど食べる？」と女の子グループに尋ねると、えっと少し驚きながら「うん、食べる」と。

あれ？何だか普通に女の子グループに参加している自分にちょっとドキマギしつつ、しばらくして「磯崎くん、美味しかった！」「また作ってきて！」と。

そこから映画の話、コンサートの話、一緒にライブハウスに行ったりと交流は続きます。

もし、あの休み時間に、「肉ジャガ作ってきたけど食べる？」と尋ねても、「いや、まだお昼時間じゃないし、いらない」「お腹いっぱいだから……」と断られていたと思います。

トンカツでもダメでしょう。トンカツも肉ジャガも食事です。生存に欠かせない栄養摂取のための行為。あの時、ケーキだったから食べてもらえて会話に入ることもできたのではないかな。

定食屋のランチで数時間居座ることはできませんが、カフェでお茶とドーナツひとつで何時間も話し、リラックスして過ごすことはきっと誰もが経験したことがあるはずです。生存の行為から離れた「食」は生活に豊かさと安らぎを与えてくれます。今の私には、あの時のケーキとアートが同義語に思えます。生活を豊かにするアートは、生存のための「食」から、ケーキ/スイーツによって別な心の充実感を与えてくれる。

今回の復興公営住宅でのプログラムは、現代の「浜通り版キルティング・ビー」を作れないかということでした。19世紀のアメリカでは、婦人たちが集まり、一枚のキルトを制作する会「キルティング・ビー」がよく催されていたそうです。それは女性たちの主要な社交場となり、社会進出のきっかけを作ったと言われています。

参加者とランチマットを作り、そこに自分の気持ちを一文表現したアップリケを装飾してもらう。そして、そのランチマットを広げてお茶会をする。お茶会の「食」は、天然酵母を用いたハード系パン「カンパーニュ」を作って、手作りのジャムやハーブオイルで食べるというもの。このアイデアは、今年度、富岡町に自生する果物からフルーツ天然酵母を作り、カンパーニュを作る活動の経験からきています。今回は、季節柄、「梅」をテーマに、初夏に獲った梅から作った天然酵母パンと韓国のお茶「梅花茶」でお茶会をするというプログラムを考えました。

手作りランチマットを囲み、参加者の婦人たちに混ぜてもらいながらのお茶会は、学生の頃の教室でのお茶会となんら変わらず、私までノスタルジックなほっこりした時間を過ごさせてもらいました。

これからもみなさんには、ランチマットを持ってお茶会を続けていただけたらとても嬉しいなと思っています。





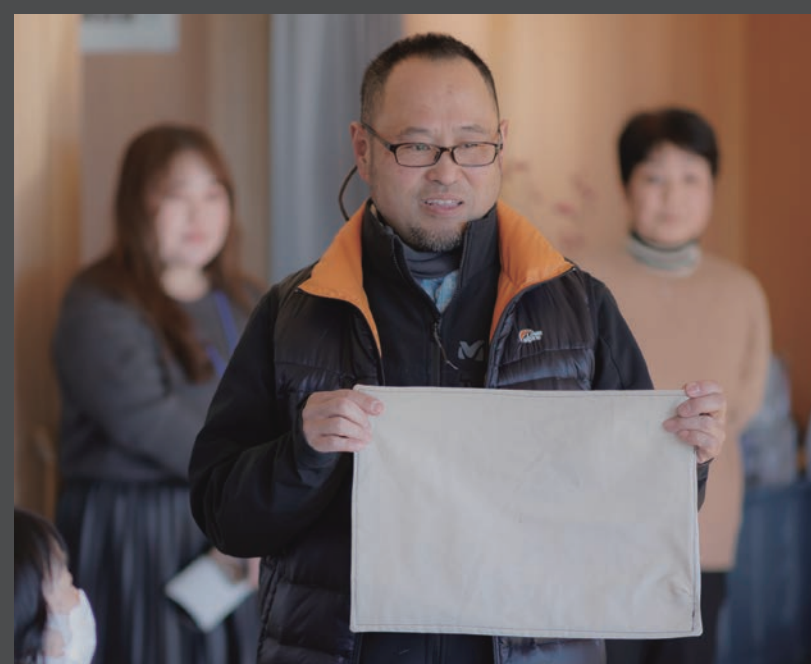
ランチマット

アーティストの磯崎道佳を招き、『「ひとことランチマット」で梅のお茶会ワークショップ』を開催しました。ワークショップは、参加者一人ひとりが自分自身で選んだ言葉をランチマットに貼り付けてオリジナルランチマットを制作するというもの。完成したそれぞれの作品からは参加者一人ひとりの気持ちや他者との関係性が垣間見え、それぞれユニークな仕上がりとなりました。

ワークショップ終了後は、磯崎が富岡町の果樹から採れた酵母で作ったオリジナルのパンを振る舞い、机の上に生けた梅の花を愛でながら一足早いお花見を楽しみました。

ワークショップで作ったランチマットが、一人での食事のときも、誰かとの食事のときも、食卓に彩りを与えてくれることを願っています。

[実施箇所] (五十音順)
北原団地、南町団地



磯崎道佳 いそぎ・みちよし

1968年水戸市生まれ。北海道ニセコ町在住。「食糧危機は必ず来る」と想い、格差、紛争、気候変動が進んだ先にあるアート+生活の新しい形を模索している。主な活動、MoMA PS1インターナショナル・スタジオ・プログラムに参加(2001)、自生の果物を使った自家製天然酵母パン・プロジェクト(2020～)、知らない者同士の手紙の交換を目的とした「パラシュートとマキオ」(2002～)、「ぞうきんぞうプロジェクト」(2004～)、「ドーム / DOMEプロジェクト」(2005～)、「笑う机」(2012～)など。

20cmの精霊

川村亘平斎 影絵師、音楽家

影と唄と共に練り歩いたあの不思議な夜の出来事を、どうやって言葉にすればいいのだろうか？考えていても仕方がない。まずはあの時と同じように、唄ってみることにする。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

3月11日を迎えるにあたって、夜ノ森の町を影と共に練り歩きたかった。それは、世界中で行われている祖霊を迎える祭りをイメージしたものである。ここにはいない誰かを迎え、共に歩く祭り。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

バリ島の師匠は言う。Wayang Kulit（バリの伝統影絵芝居）は現実と非現実の狭間に現れ、人間と自然を繋ぐ行為。影を視るとは、視えないものを視ること。ここにはいない誰かを想うこと。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

10年ぶりに福島を訪れ、浜通りを巡った。全国各地でフィールドワークをして、その土地から感じる何かを作品にしてきたが、ここでは不思議と何も感じなかった。

それは削り取られた「20cmの表土」のせいかもしれない。震災以後、除染のため福島の表土は剥ぎ取られ続けている。2000年分の堆積の、その中にあったであろう僕たちの過去や未来。土地の精霊がいなくなった場所で、僕たちは何と繋がれるか？

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

夕暮れに遠く、阿武隈山地が見える。夜ノ森にガムランの音色が響き、影が踊り出す。僕が何の前触れもなく唄い出すと、誰ともなく合いの手が始まって、唄は止まらなくなった。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

その唄は、意味のない言葉の羅列だった。唄というよりも掛け声に近い何か。いつの間にか真っ暗になった夜ノ森の、更地になった町の中を、影と唄と練り歩く。ガムランのビートに乗せ、延々と続くコール&レスポンスは、かつてどこかにあった祭囃子のようなだった。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

不思議な高揚感を感じながら1時間以上練り歩き、ゴールの夜ノ森駅への曲がり角で、参加していたイチゼンさんが突如語り出す。

「この角にガソリンスタンドがあったんです。その隣では羊を飼っていて……私はこの先の家で生まれました」

影と唄に誘われて、イチゼンさんから溢れ出た言葉は、特別な光を放っていた。太古より、大切な何かを語るために続けられてきた尊い営み。芸能の初まりを彷彿とさせるその時間に、僕は狼狽えた。

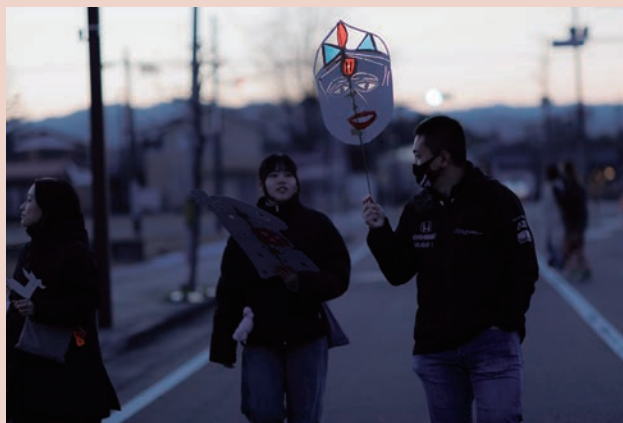
剥ぎ取られた「20cmの表土」と共に、精霊は失われたと思っていた。それは、そんな簡単なことではなかったのだ。頭で考えることは、すぐに破綻する。2011年の3月11日に、すでに気がついていたはずだった。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン

何かがやってくるまで待つ時間。僕たちは、今その時間を与えられているだろうか？夜ノ森の、哀しいまでの更地は、その時間を与えてくれた。何もないからこそ、与えられる時間。

誰もいないからないのではない。影は視えないものを視ること。僕たちは「それ」がやってくるまで、待たなければならない。

ヨイヨイヨ〜イ ヨッテンラッテン ヨノモリラッテン







影絵制作 & 上演

影絵師、音楽家の川村亘平齋を招き 2度の影絵制作と上演ワークショップを富岡町夜の森地区で行いました。

初回は夜の森公園にて『オカゲサマ - 人もいて、物もいて、精霊もいて -』を開催。私たちが日常的に使う「おかげさまで」という言葉の中に「かげ」という単語が含まれていることに注目し、感謝の気持ちを元に影絵制作と上演ワークショップを実施しました。

2回目は、富岡にいる／いた／これから生まれるかもしれない生き物を参加者に想像してもらい、その影絵人形を制作しました。その後、制作した影絵人形を持ち、ガムラン音楽と共に夜の森エリアを練り歩くパフォーマンスを実施しました。

普段はあまり意識することのない、影という存在を通して私たちの日常を見つめ直すことで、普段は見えない何かの一旦に触れられたような活動になりました。

[実施箇所] (五十音順)

夜ノ森駅周辺、夜ノ森公園



川村亘平齋 かわむら・こうへいさい

インドネシア・バリ島の伝統影絵【ワヤン・クリット】を現代的な文脈で捉え直し、新たな芸能のカクチを模索し続ける影絵師。世界各国で影絵と音楽のパフォーマンスを発表。日本各地でフィールドワークやワークショップを行い、土地の記憶を手がかりに影絵作品製作。その他、切り絵や壁画、映像制作、映画・CM等への楽曲提供など幅広く活動している。ガムランを使った音楽ユニット【滞空時間】主宰。



集まる生き物、集まる人

木村充伯 彫刻家

今回、ワークショップと展示の依頼があり、大熊町を訪れた。東海道新幹線と常磐線乗り継ぎ、大野駅で降りると、3月15日の商業施設オープンに向けて駅前で大規模な工事が行われており、今後、人の流れが急激に増えるだろうと感じた。福島の沿岸部を訪れるのは、震災前・後を含めて初めてのことであった。

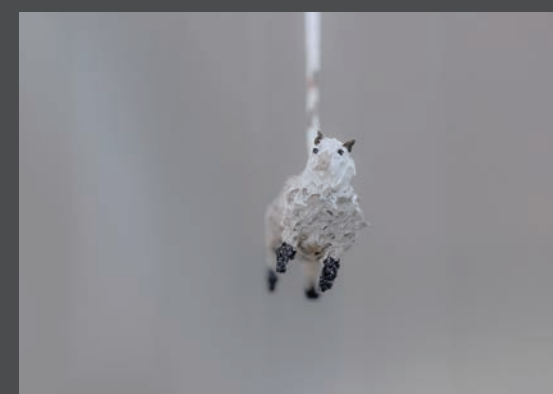
キュレーターの山本暁甫さんの案内で、富岡町の海岸に流されたまま残る船や、震災時のままの箸や皿が残されていたかっぱ寿司、オープン控えていたヤマダ電機などを見せられた。また、後日、津波に流されて門だけが残る病院や民家も目にした。何度も車に乗せてもらって通っていた場所だったのに、その衝撃的な光景を見逃していた自分に驚いた。ぼーっとしていたら、震災の影響を忘れてしまいそうになるのだ。この駅前や商店街はかつて人々が行き交っていた場所であり、その場所の記憶を失うことがあると感じた。また、人々が集まることの大切さを改めて実感した。

展示の内容は、福島に現在生息している動物たちを油絵具で制作し、それらを天井から吊るすという形にした。福島の動物に関しては、「ふくしまレッドリスト」を参考にし、福島県に生息する哺乳類、両生類、爬虫類、計86種にわたる動物をリストアップした。リストに含まれる動物には、

コウモリやイタチ、ニホンカモシカ、ツキノワグマといった日本に生息する動物のほか、アメリカミンクやアライグマなどの外来種、またイエネコ、イエイヌ、イエネズミといった人間の生活圏にいる動物も含まれている。以前、958属の動物の顔を作ったことがあるが、今回は全身を制作し、ひもに付けた絵具から手足を生やすような形で、重力を無視して動物たちに足や手を作り、生き物たちが泳いでいるような、浮いているような、宇宙空間のような展示になった。

ワークショップは、私が展示した福島に現在生息している動物たちの中で行われ、福島にかつて存在していたり、これから現れるであろう動物を参加者に制作してもらった。参加者の年齢層は広く、1歳くらいの子供から60歳くらいの方まで参加した。参加者には特製の道具を渡し、板の上で油絵具を使って動物を塑造してもらった。動物に詳しい方が多かった。ウサギやカメ、クマなどを作った方もいれば、自分の心の中の生き物を形にした方、ウェットティッシュを使って手で触りながら制作していた方もいた。油絵具の扱いには難しさもあったが、参加者たちは油絵具でぐちゃぐちゃになりながらも楽しんでた。

時間の経過とともに変化する自分の作品にさらに面白さを感じると思う。







油絵の具で動物づくり

さまざまな動物の作品を制作している彫刻家・木村充伯を講師に招き、油絵の具を使って福島の動物を作るワークショップを開催しました。

福島県浜通りは東は太平洋に面し、西には阿武隈山地が広がる地域で、東北地方の中でも温暖な気候のため、古くから多くの動植物や海洋生物が生息してきました。こうした浜通りの特徴を共有した上で、参加者は思い思いに浜通りに生きる／生きた動物や、自身の愛するペットを思い浮かべながら油絵具で彫刻作品を作りました。

[実施箇所] (五十音順)

大熊インキュベーションセンター、linkる大熊

木村充伯 きむら・みつのり

1983年静岡県生まれ。2007年名古屋造形芸術大学大学院環境造形研究修了。「人と動物の関係」をテーマに、環境や動物観、祖先と子孫など、生と死をつなぐものに焦点を当てた作品を制作している。近年は、毛皮(毛)のように表面に「毛が生えている」状態を再現する「毛が生えるパネル」を開発し、哺乳類の毛皮(毛)を再現している。また、コロナ禍以降は地球上での動植物の空気の繋がりから、呼吸や匂い、音に関する作品を制作。



成果展示

2025.3.15
OIC

2025年3月15日（土）「アートで広げる みんなの元気プロジェクト 2024」の成果展示を大熊インキュベーションセンターで開催。同日は、同会場で毎年開催される「復興交流イベント おおくま学園祭」の教室の一室を本成果展の会場として実施しました。成果展では、取り組みを紹介するパネルや参加者がワークショップで制作した作品の展示を行うことで、本プロジェクトの成果を広く伝える場となりました。

来場者数は約 400 名。多くの来場者に本プロジェクトの意義や福島の復興公営住宅の現状を広く知っていただく良い機会となり、今後の活動に対する理解と関心を一層高めることができました。





実施の効果と評価

今回、4名のアーティストが多様なワークショップを展開することで、参加者がさまざまな角度から創作に取り組む、自己表現の幅を広げられる貴重な機会を提供することができました。いずれのワークショップも、作品を通じたやりとりが自然に会話を生み出し、普段あまり関わりのなかった方々とのつながりが芽生えるなど、住民同士の親密度も高まりました。

課題と今後の展望

ワークショップ全般に対してはおおむね好評をいただき、「来年度もぜひ参加したい」「完成した作品を身に着けて近所を歩きたい」という声に参加者から寄せられています。アートプロジェクトが住民の生きる活力を引き出し、復興公営住宅全体の雰囲気にも変化をもたらしている点は、大きな手応えと言えるでしょう。

本年度の取り組みでは、福島県の復興公営住宅を支援する「NPO 法人みんぷく」との協働により、円滑な運営を行うことができました。各ワークショップを通じて、運営事務局とみんぷく、そして参加者との連帯感が育まれ、本プロジェクト終了後も、それぞれの復興公営住宅のコミュニティを越えた住民同士の交流が続いています。

総じて、アートには人と人、そして地域同士やたくさんのかつを結びつける大きな力があり、コミュニティ再生や住民の心のケアに有効であることを改めて実感する機会となりました。住民の方々の笑顔や新しい関係性の創出は、浜通り地域や復興公営住宅が直面するさまざまな課題を解決へと導く重要な一歩です。

より多くの方々が創作の喜びを共有し、地域の活性化につながるよう、福島の未来に向けてアートを通じた地域づくりに取り組んでまいります。



最初は参加せず、見ていようかと思いましたが、参加してとても楽しかったし、息抜きができた。芸術的な先生にお会いして、とてもよかったし、うれしかったな、と思いました。

みんなで話し合いながら作れて、とても楽しかったです。

最初はどうなることかと思いましたが、本当に楽しく素敵なワークショップでした。

なかなか大変でしたが、完成すると達成感があり、楽しかったです。

夫婦で参加しました。良い冥途の土産になりました。

頭脳的にも色・柄・位置等に考えられ、完成してみると、なかなかの出来で、うれしく（アドバイスもやさしくて!!）ありがとうございました！

自分の人生では、絶対に出会わなかった人や芸術と触れあえて、とても充実した時間を過ごせました。最高でした！

経験したことのない内容で、楽しく過ごせました。久しぶりに笑いました。それも大きい声で！

今年一番に笑えました。

とても有意義でした。面白かったです。来年も、ヴィヴィアン先生には、来てもらって、また、ワークショップお願いします。最高でした。

先生のお化粧とファッションにびっくりしました。芸術家は違うと思いました。さすが東京ですね。写真まで撮ってもらって、ありがとう。また、やってください。楽しかった。

初めて参加してとても楽しく、長生きします。元気でもっともっと長生きしそうです。

ウィッグをかぶせてもらって、普段の自分では、想像もつかない感じで、違う自分を発見した感じでした。

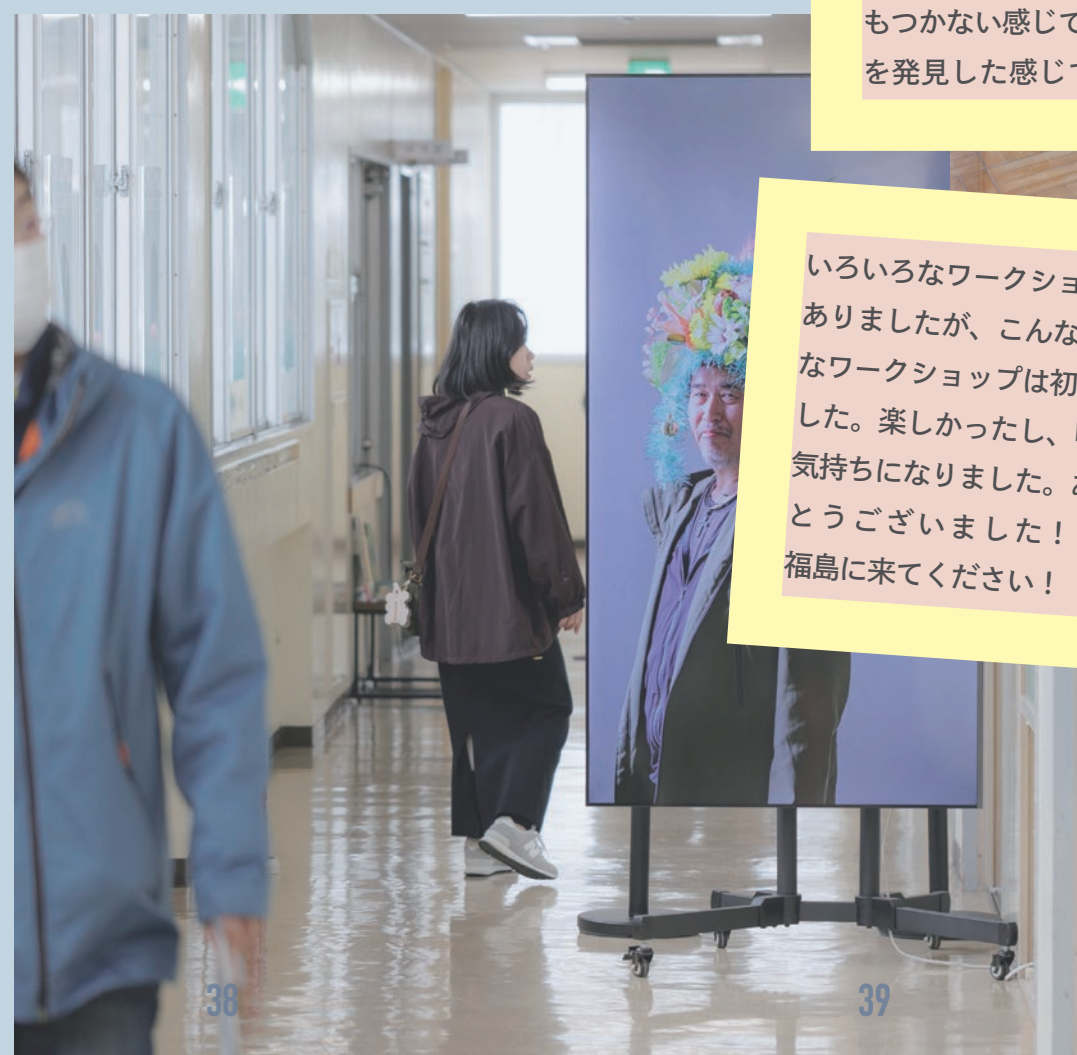
ヴィヴィアン先生はじめ、スタッフの皆様も優しく教えてくださり、参加することができました。本当に楽しく、一生忘れられない思い出になりました。ぜひ、またお会いしたいです！！本当にありがとうございました！

スタッフの方もヴィヴィアン佐藤さんも、丁寧に優しく教えて下さり、とても楽しいひと時を過ごしました。夢中になって、何かするというのが、とても素晴らしいことですね。

いろいろなワークショップがありましたが、こんなに破格なワークショップは初めてでした。楽しかったし、明るい気持ちになりました。ありがとうございました！また、福島に来てください！

最初は大変でしたが、やっているうちに楽しくなってきたので、参加してよかったと思います。

初めてのランチマットづくり、楽しく仕上げることができました。言葉を考える時間、迷いましたが、離れて暮らすペットの名前を入れさせていただきました。



アートで広げるみんなの元気プロジェクト 2024 報告書

創造の力で福島の元気な未来を描く

執 筆 阿部峻久、磯崎道佳、ヴィヴィアン佐藤、川村亘平斎、木村充伯、山本暁甫

編 集 嘉原 妙

デ ザ イ ン 藤城光

印 刷 graphic

発 行 福島県

受託事業者 一般社団法人 HAMADOORI13

協 力 NPO 法人みんぷく、NPO 法人インビジブル

